

ASD 児の社会性の支援に向けた ムーブメント教育・療法による体育の取組

—MEPA-R での変化と教員アンケートからの一考察—

尾関美和 高橋真琴

（鳴門教育大学大学院学校教育研究科）

KEY WORDS: ASD 児 体育 ムーブメント教育・療法

（はじめに）

DSM-5 では、自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder 以下 ASD）の診断基準が変更し、支援方法に新しい流れの必要性が叫ばれている。高橋ら（2014）は、社会性に関する内容として、「相互の対人的-情緒的関係の欠落」の支援として、対人的相互反応で非言語的コミュニケーション行動を用いることを述べている。また近年、ASD 児の教育として、発達検査の結果を踏まえた学習支援や問題行動に対するエビデンスにもとづく幾つかの方法がとられている。しかしこれらは個別的な対応が多く、他の場面で学習した成果を発揮することなど般化が困難となる場合がある。これは ASD 児の特性に所以しているといえる。

本研究では、ASD 児の社会性を発達の視点からとらえ、教員の児童観察の視点を明らかにしたうえで授業実践を行い、実践にあたり授業実践のベースとしてムーブメント教育・療法に着目した。この教育・療法を用いる根拠としては、特別支援学校学習指導要領体育の目標にも関連している。ASD 児に求められる社会性と体育の目標とを照らし合わせ、これらの要素を含み集団の学びを重視しているムーブメント教育・療法を取り入れた指導を試みたいと考えた。

よって、本研究では、ムーブメント教育・療法の理論を用いて児童の行動変化を分析し、合わせて、支援している教員の観察視点の変化を追うことにより、児童の発達を促すための教育の手がかりを、実践の記録、教員の観察記録、アンケートを基に検証することを目的とした。

（方法）

本研究での対象児童は、知的障害特別支援学校小学部児童 1、2 年生 ASD 児 9 名である。児童の実態把握には、ムーブメント教育・療法の指導で使用されるアセスメントである小林（2005）の MEPA-R（Movement Education and Therapy Program Assessment-Revised 以下 MEPA-R）を用いる。このアセスメントは、行動を支える 3 分野 6 領域について、0 歳（0 ヶ月）から 6 歳（72 ヶ月）までの発達段階に応じて項目を、達成（+）、未達成（-）、芽生え（±）でチェックし、その結果を MEPA-R プロフィール表で表す。そのプロフィール表を基に学習目標及び学習活動を決定し、一定の期間授業実践を行った後、再度アセスメントのチェックを行い、MEPA-R プロフィール表を作成する。この評価方法を用いることにより授業の振り返りを行うことができ、PDCA サイクルを実践することができる。

本研究では、約 3 ヶ月間で体育の授業実践を 6 回行った。そして、授業実践後に MEPA-R の第 2 回目の記録を行い、プロフィール表による達成の変化を記録した。さらに、教員による体育の授業や学校生活での観察記録と授業後のアンケートの記載内容により、児童の授業での行動変化や日常生活での行動変化について記録を得た。

尚、本研究は鳴門教育大学倫理審査委員会での承認を受け、対象となった児童、保護者には本研究に関する説明を行い、同意が得られた児童を対象としている。

（結果）

第 1 回目の MEPA-R の結果と比較すると、第 2 回目の MEPA-R 評価では、9 名中 7 名の児童に複数の項目で達成（+）や芽生え（±）の増加がみられた。特に「言語」分野、「運動・感覚」分野に於いて芽生えや達成が多く確認された。2 名については、MEPA-R 評価での変化はみられなかったが、教員の観察記録に「休み時間に友だちのまねをする様子が見られた」ことや「友だちを手招きして誘う行動が見られた」などが記録されており、動きの模倣や身振りの理解・使用等、非言語的コミュニケーションに関する力の向上が記載されていた。このように、児童全員にムーブメント教育・療法を用いた体育での授業実践の影響が見られた。

教員のアンケートについては、樋口（2020）KH Coder の共起ネットワークを作成した。その結果、教員が児童の目標達成を意識して支援していたこと、児童が目標達成へと近づいてくると、教員はさらに高い目標を目指して支援していることが考察された。「授業」と「楽しい」という結びつきもみられ、ムーブメント教育・療法が大切にしている「楽しみながら学ぶ」ことが子どもたちの発達を支援することが明らかとなった。

（考察）

MEPA-R の結果や教員の観察記録により、対象とした児童 9 名全員に望ましい行動変化がみられたことから、ムーブメント教育・療法の遊具（教材）などでの動的環境による「楽しさ」は、ASD の能力の弱さである心理行動特性にも大きく働きかけたことが考察される。是枝らは、ASD の運動模倣能力の弱さには、中枢神経系の機能障害に起因することが示唆されていることに加え、模倣スキルの学習に関しては、各行為やジェスチャーの意味を的確に伝えること、他者との関係性の促進にも配慮した支援の必要性を述べている。従って、大勢で楽しく行う活動のなかにこそ、児童の活動の意欲を高め自主的な動きを導き出す力があると考えられる。

KH Coder 分析からは、教員は児童が授業に落ち着いて参加できるようになると、教材の効果にも目を向け、児童の目標をさらに高みへと期待しながら指導していることが示唆された。授業目標の共有、達成が、児童の学習活動へのさらなる参加と教員の積極的な授業指導の向上との相乗効果を生じていると予測される。

（文献）

日本精神神経学会（監修）高橋三郎・大野裕（監訳）（2014）DSM-5 精神疾患の診断統計マニュアル. 医学書院.
小林芳文（2005）MEPA-R ムーブメント教育・療法プログラムアセスメント. 日本文化科学者.
是枝喜代治・小林芳文・太田昌孝（2004）自閉症児の運動模倣能力の特性. 発達障害研究, 25(4), 265-280.
樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第 2 版. ナカニシヤ出版
本研究は JSPS 科研費 19K23290 助成を受けたものです。
(OZEKI Miwa, TAKAHASHI Makoto)